

レーニン Lenin, Vladimir Ilich 1870 ~ 1924

ロシアのマルクス主義者の立場に立つ革命家、思想家。専制君主制下のロシアで育ち、兄がロシア皇帝暗殺を企てた嫌疑をかけられて処刑されたことなどから現状変革への志向を強め、19世紀ヨーロッパにおけるマルクス・エンゲルスの思想を20世紀初頭のロシアの現実へと創造的に適用した。

レーニンは、学生時代から革命運動の実践に関わりつつ、『ロシアにおける資本主義の発達』(1899)、『民主主義革命における社会民主党の二つの戦術』(1905)などを著した。1903年のロシア社会民主労働党の分裂後は、ボリシェヴィキ(多数派の意味)を率いて国外の亡命地を転々としながらロシアの革命運動を指導した。

1914年に第一次世界大戦が勃発したときには、この戦争の性格についてカウツキー等と論争しつつ1916年に『帝国主義論』を執筆し、独占資本主義時代の政治と戦争を経済学的に分析した。1917年にロシアで二月革命が起きると、亡命先から帰国して革命運動を指導しソヴィエト権力樹立を掲げ、10月革命として実現させた。『国家と革命』は、この過程で著されたものである。

レーニンは、歴史上はじめて社会主義革命を成功させたことで、その後の世界政治にはかりしれない影響を与えた。最近では、1991年のソ連の崩壊という世界史的事件もあり、レーニンの評価については、議会制民主主義の否定など理論上の誤りも含めて、新段階を迎えている。

Great Books 42 帝国主義論 (Империализм, как высшая стадия капитализма)

『帝国主義論』(原題『資本主義の最高の段階としての帝国主義』)は1916年、レーニンの亡命先であったスイスのチューリッヒにおいて、チューリッヒの図書館の蔵書を最大限に活用して執筆された。レーニンがこの本を書いた目的は、現下の第一次世界大戦の本当の性格を明らかにすることにあった。その勃発を誰も予想していなかったこの戦争について、当時の社会主義の指導者たち、特に大きな影響力を持っていたカール・カウツキーが「祖国擁護」論に立ち戦争を結果的に容認する態度に出たことを、レーニンは厳しく批判した。この本の少なからぬ部分は、カウツキーらへの批判で占められている。

レーニンは、帝国主義とは経済的には独占資本主義であり、国内的には金融寡頭制が国を支配し、国際的には数力国の強力な独占資本主義国が帝国主義的植民地政策をすすめる、世界市場を分け合うために争いあい、最終的に世界の領土的分割を完了した資本主義であると分析した。そして第一次世界大戦の性格について、世界の分割と再分割をめぐる帝国主義諸国間の闘争であるとした。

本書のなかで、レーニンは「資本主義はその帝国主義的段階で生産の全面的な社会化にぴったり接近する。それは、いわば資本家たちを、彼らの意志と意識に反して、競争の完全な自由から完全な社会化への過渡的な、ある新しい社会秩序にひきずりこむ」と述べ、生産の社会化と資本主義的な外皮との矛盾・衝突が次の変革への現実的根拠であることを述べた。

レーニンはヒルファディングの『金融資本論』、ホブソンの『帝国主義論』をはじめ多数の論文や各種統計を駆使して、独占資本主義のもとでの銀行の役割、金融寡頭制、資本の輸出、国際カルテルの成立など帝国主義の経済的特徴を分析した。これらは現代の諸情勢の分析にも有効であり示唆に富むものであるとされている。

Great Books 43 国家と革命(Государство и революция)

1917年ロシアでの革命闘争は大きく前進し、帝国主義戦争を内乱へというスローガンは、専制君主制を打倒した二月革命によって現実のものとなった。レーニンは亡命先のチューリッヒでこの報を聞き、有名な「遠方からの手紙」をロシアに送った。この手紙の中で、彼は、ブルジョワ民主主義革命(二月革命)からプロレタリア社会主義革命へ移行しなければならないことを提起した。レーニンは4月にロシアへ帰国し、二月革命によって生じた政治的諸条件を活用して、「全権力をソヴィエトへ」というスローガンを平和的に実現することを模索した。しかしこの年の7月事件と8月のコルニーロフの陰謀

などにより、反動化した臨時政府のボリシェヴィキ党への弾圧が始まって、革命への平和的移行の可能性は消滅した。この反動攻勢により、レーニンは、ラズリフ湖、次いでフィンランドのヘルシングフォールスに亡命を余儀なくされた。『国家と革命』の大半は、この間の7月から9月にかけて執筆され、十月革命後に出版された。

『国家と革命』は、革命闘争のさなかの亡命先で、手元の「青いノート」等があったとはいえ限られた文献資料のもとに大急ぎで執筆されたが、目前の反動攻勢に抗してロシア革命の方針文書としての実践的性格も刻印されている。

この著作の眼目は、資本主義のもとでの国家の階級的な性格とその「廃絶」を、マルクス・エンゲルスの思想を参照しながら極めて厳しい調子で描き出したことである。レーニンは、資本主義社会が独占資本主義社会に発展し、それが変革主体の力によって社会主義に転換させられ、最終的には系統的・組織的強制のない共産主義社会へ至る道筋を展望した。その根底にあるのは、『帝国主義論』で展開した「生産の全面的な社会化」が経済的には資本主義を限りなく社会主義に近付ける、とする認識であった。しかしその変革は自然成長的に実現することはいずれ、重要なのはそれを執行する「特殊な力」(プロレタリアートの独裁)であるとした。

本書はマルクス主義国家論の古典的著作とされている。同時に「不可避」とされている「暴力革命」、「議会制度の廃棄」(『レーニン』全集第25巻)などについては状況的な規定であり普遍化はできないとする評価が定まりつつある。

◆ Great Books 文献案内

- 📖 帝国主義論(科学的社会主義の古典選書)/聴濤弘(訳)
新日本出版社 1999年刊 238p <331.6/210> 資料番号 21544366
- 📖 国家と革命・国家について(新日本文庫)/聴濤弘(訳)
新日本出版社 1985年刊 224p <309.3/51> 資料番号 21544358
- 📖 世界の名著 52 レーニン/江口朴郎(編)
中央公論社 1966年刊 606p <080/5/52> 資料番号 12784674
- 📖 レーニン全集 第22巻/ソ同盟共産党中央委員会附属マルクス=エンゲルス=レ=ニン研究所(編)
大月書店 1957年刊 468p <308/11/22> 資料番号 10635639
- 📖 レーニン全集 第25巻/ソ同盟共産党中央委員会附属マルクス=エンゲルス=レ=ニン研究所(編)
大月書店 1957年刊 585p <308/11/25> 資料番号 10635662

◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 レ=ニン 上・下/ロバート・サーヴィス(著) 河合秀和(訳)
岩波書店 2002年刊 <289.3LL/1538/1~2> 資料番号 21476494, 21510672
- 📖 レ=ニンと『資本論』1~7/不破哲三(著)
新日本出版社 1998~2001年刊 <331.6GG/196/1~7>
- 📖 レーニンの思い出 上・下/クールプスカヤ(著) 内海周平(訳)
青木書店 1990年刊 <289.3Y/1014/1~2> 資料番号 20223178, 20223186
- 📖 金融資本論 改版 上・下(岩波文庫)/ヒルファディング(著) 岡崎次郎(訳)
岩波書店 1982年刊 <433/ヒA/1~2> 資料番号 12256202, 12256210
- 📖 レーニン(現代思想選)/トロツキー(著) 松田道雄, 竹内成明(訳)
河出書房新社 1980年刊 431p <289.3L/577> 資料番号 10550002
- 📖 レーニン(世界の思想家)/和田春樹(編)
平凡社 1977年刊 252p <363.5J/138> 資料番号 10991495
- 📖 帝国主義論 上・下(岩波文庫)/ホブスン(著) 矢内原忠雄(訳)
岩波書店 1951~1952年刊 <433/ホ/1~2> 資料番号 12256236, 12256244